

---

# 妖と夜叉 番外編

霜月サヤ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

妖と夜叉 番外編

### 【Zコード】

N8069Y

### 【作者名】

霜月サヤ

### 【あらすじ】

連載『妖と夜叉』の番外編集です。

## はじめに

こちらは『妖と夜叉』の番外編集となつております。  
ヒロインの詳しい設定は、本編の方をご覧ください。

### 簡単にヒロイン設定を紹介

ヒロイン（奴良リオ）は、リクオの双子の姉です。

また、番外編は思いついた順に書いていくため、時期がバラバラとなります。

1話ごとに完結となるため、読むには支障はないと思います。

番外編では、キャラ崩壊が目立ちます。  
その辺はご了承ください。

それでは、番外編集は次話よりです。

本編『妖と夜叉』もよろしくお願ひします。

浪合ゆえに起るJIS (複書モ)

声優ネタです

## 混合ゆえに起きる「こと」

奴良家にて世話をなつてこる坂田銀時。  
そんなある日のこと。

混合ゆえに起きる「こと」

なんやかんやで銀時の話しが相手は、リクオとリオだった。

「義兄弟？」

「そうなんだよ。今田、義兄弟の鳩くんが来るんだ」

「鳩の兄貴は、結構アレだもんね」

「ボクが三代目継がないつて言つていた頃と比べればマシだよ……」

「やういえば坂田さんの趣つて、どういなく兄貴の声に似てこるやうな……」

「あ……確かに……似ているかも」

「?.?どんな奴?」

この家のことを聞いていたが、義兄弟であるところの“鳩”的話が出た。

「ん~、病弱な妖怪」

「なのに、熱血なんだよね」

と、その時、周りの者どもが騒ぎだした。

「あ、鳩くん来たみたい」

「坂田さん、会つてみる?」

「ん。暇だしな」

その鳩とやらに会つてみるとこした。

「冗談へおひやへ~」

「おお、リオか。見ねえつけ、またキレイになつたな

「やだあ、冗談よしぃ」

「リオ、鳩くん。そこまでにしなよ」

- 1 -

似て いる も 何 も、 同じ ジ や ねえ か ア ア ア ア ア ア ア ！

「ん？ リクオ、誰だ？」

坂田銀時さん。昨日から本家で預かってんだよ」

なんとか、訴ありみたいな感じだよ」

鳩たよこしきな

あ  
坂田銀時です」

.....

備と同じ反応しやねが二番目

あ  
考  
え  
が  
ら  
同  
じ  
様  
餐  
し  
や  
な  
か  
が  
ま

あくまで石か

同じ 田 和しや 仕方なしよね」

「ちよッ！リオ！！伏せ字の位置が違うから！伏せ字の意味をなさなくなるからー！」

混合油に起ること。

それは、同じ声を持つ者が出会う可能性があるってことだ。

「ハ、ハツのハヂ、アハハハハハ」

首のないイケメンわざ（前書き）

タイトル通りのキャラが出ます

## 首のないイケメンちゃん

奴良家でお世話になれることは必然的に、本家の妖怪と玉骨のつてつりもの。

とまあえず、挨拶を済む。「う」と。

首のないイケメンちゃん

「どうあれ首無かるべつつか」

リオがやつ語った。

「首無?」

「うそ、まあ見た田も名前通りなんだけど、すりじゃイケメンだよ」

「イケメンって何だ?」

「あー、イケてるメンツの略なんだけど… 素すの顔が整つてるつて」と

「ふーん」

「あ、でも坂田さん平気かな？」

「だ、大丈夫だつて」

「じゃあ行こうか」

リオは立ち上がり、首無のところに行く。それに銀時は続いて歩いた。

「やつほー首無」

「リオ様? どうなさいました?」

「うそ、ちょっとね」

「ああ、そちらの方のことですか?」

「まあ、そなんだけどさ。坂田さん、この人が首無。んで、この人が…」

「坂田銀時だ」

「坂田殿ですか。私は首無です」

「リオから聞いたけど、マジで首ねえの?」

「ええ。なので、いつにマフラーをし、首がないことを隠してます」

「ちなみに名古屋まで首が飛ぶ」

「ははは」

「名古屋つてどーじ?」

「えーと…ねえ首無」

銀時がこの時代の人間でないことを思い出したリオは、首無に聞いた。

「はい?」

「江戸時代だと名古屋は何?」

「江戸時代ですか…確かに、尾張ですね」

「尾張か。それじゃあ、相当だな」

「大変でしたよ」

「わかりました」  
「まあやつこいつ」と、首無よひじくね

区切りがよかつたので、首無と別れた。

「坂田さん、首無は怒らせない方がいいからね」

「何でだ？」

「言つじやないですか。普段穏やかな人程、怒ると恐いって」

「あー そうだな」

「リオ様、聞けますよ」

「う……げ……（地獄耳……）」

「別れて間もないのに、いつからですよ。それでは聞こえて当たり前です。」

「すみませんでしたーーー。」

「（なんか、首無つて奴には、あんまし接触しねエ」とだな…）」

首無トリオのやり取りを見ると、確かに“穏やかな人程怒ると恐い”というのは正しいと思えた銀時であった。

氷には気をせけよ（前書き）

タイトルでお分かりの方です

## 氷には氣を付けよ

「奴良家の『ご飯、力チカチになつた』ご飯なんだよね」

「はあ？」

リオの言葉に疑問を感じる銀時であつた。

氷には氣を付けよ

「じつこじつ」とだよ

「あ、やつこえればまだ氷麗ちゃんには合つてこないよね」

「氷麗？誰だ？」

「雪女の妖怪だよ。氷麗ちゃんが、『ご飯を作つたり、運んだりして  
いるから、『ご飯が氷付けになるんだよ』

「それで、やつきの言葉になるわけなんだな」

גָּדוֹלָה וְעַמְּדָה

氷麗ちゃんに会おうかつて言葉を続けた。

「いちいち会わねえといけねえの？」

「そんなことないよ。会こに行こうって言つてるのは、みんなリクオと盃を交わしたメンバーだけだよ」

「ふーん。で、その雪女もか」

「うん。あ、氷麗ちゃん」

前方の方には、洗濯物を運んで干している氷麗の姿があつた。

「リオ様！どうなさいました？というより、そちらの方は？」

「えっとね……坂田銀時だ」……です」

ま、まさか！？り、り、リオ様の

一 邊りから...。

氷麗が詫おうとした言葉を遮り、否定するりオ。

「 そ う で す か 」

— そ う な の 、 し ば ら く 回 介 に な る 坂 田 さ ん だ よ 」

「ご挨拶遅れました。私は雪女の氷麗です」

「改めて、俺は坂田銀時だ」

「それじゃ、氷麗ちゃんに会つたし、次行こう！」

リオは銀時を引っ張り、次の人に会いに行つた。

その後は、口うるさいカラス天狗を始め、遠野の淡島曰く工口田坊の黒田坊、力なら負けない青田坊、マイペースな河童、巨乳の毛娼けじょう妓、その他もろもろ会いに行つたのだった。

## 夜空の下で（前書き）

サイトが一周年の際にリクエストされた作品

## 夜空の下で

「銀時～！銀時～！」

「リオ？どうした

「散歩しよ？」

彼女はそう言った。

夜空の下で

「夜なのにか？」

「夜だからだよ。というか、付き合つて

「何に？」

「巡回」

熱心なこつた、と銀時は思つた。

「それはついでなんだけどね」

「ついでついで」

「そんな」と言った彼女は、やはり多少沖田君の影響を受けている、と銀時は思った。

「わかったよ」

「へへへ…久しぶりの一人つきだよ」

「そうだな…」

「そんな」と気付き、久しぶりのドキドキ感になる。

「銀時ありがと」

「どうした? 急に」

「うんん、何でもないよ」

しばらく静寂となつた。

「…」

「ん?」

急に名前を呼んだ銀時に、振り向くリオ。

「お前に会えて良かつたよ」

「私もだよ、銀時」

そんな会話をされてることを知っているのは、夜空に輝く星らのみであった。

非番＝悪運（前書き）

リクエスト作品

時期

本編、第四十八訓後と第四十九訓前

## 非番＝悪運

私の非番の日は、厄日なのか？って切実に問いたい。

非番＝悪運

非番の日。いつも通りに、万事屋でのんびり過ごしていた。

ド「オオオオオン！と万事屋が壊れるまでは。

「アツハツハツハツハツ、金時～。遊びに来たぜよ」

「銀時だアアアアアアアア！…そして、家壊すなアアアアアアアア…！」

「グフツ」

相手に飛び蹴りをかました銀時。

「誰？」

「あ、奴良さんは初めてですね。銀さんの知り合いの坂本辰馬さ

んですよ」

「ふ～ん、そうなんだ。…銀時、その辺にしたら～？」

未だに、言い合（）（と言つても、銀時が一方的に蹴つたり殴つたりしてい）（）している一人に声をかけた。

「リオ…」

「えと、はじめまして坂本辰馬さん。真選組一番隊副隊長、奴良リオです」

「アツハツハツハツハツ、よろしくじや も」

「コイツは、頭カラな奴だから」

「アツハツハツハツハツ。金時、ヒヂトイじや も」

「銀な、銀」

「なんか…変わった人だね」

リオは思わず言つ。

「お嬢ちやんもヒヂトイじや も」

「坂本さん、陸奥さんは？」

今まで空氣化となつっていた新八が聞いた。

「…いや、空氣化したのは、作者アンタだろ」

ジャキと坂本の後ろに銃が備えられた。

「あ

「陸奥さん」

「頭が邪魔したぜよ」

その一言を聞いて、坂本を引きずりながら帰った。

「玄関…壊されたままだね…」

「そうだね…」

「なんか疲れたから帰るよ…」

「頭カラの奴を相手にしていたからなア」

「奴良さん、気をつけ」

「ありがとう、新八くん。じゃあね」

リオは万事屋を後にした。

万事屋からの帰り道。

別の意味で見慣れた衣服に気がついた。

「…あ」

今日は非番だ。最も、非番じゃなくても仕事はしたくないが。（沖田影響）

「（相手が、相手だし…）」

その人物を追うように歩む。

その人物は、人通りが少ない路地裏へ入った。

「（気づかかれている…？）」

そう疑問になつたが、リオも路地裏へと入つた。  
それと同時に、背後から気配がした。

「てめエ、あん時の犬だなア」

「やつぱりアナタね、高杉晋助」

「肝が据えている女は嫌いじゃねエ」

「それはどうも」

平然と言つコオだが、後ろから刃が備えられているのだ。

「てめエ、何者だ？」

「真選組に所属している奴良リオよ」

「はぐらかすんじゃね」

「はぐらかしてなんかいないわ」

高杉が聞きたことをかわすよつて言つリオ。

「…………」

「妖怪、ぬらりひょん」

「妖怪イ？」

「もう。もう一人の私」

「あん時、てめエが消えたのはア……」

「妖怪の力」

正直、敵である高杉に『『えて良い情報かつて聞われれば、答へはれのことを喋つているリオ。

だがリオにとつては、高杉の無言の圧力によつて、喋つてこらうなものだつた。

「ククク…ますます欲しくなつたね」

「…………アンタの仲間なんてならない」

「そりやア、そりだらうなア」

「…………」

「またなア」

「あ……」

容易く、高杉に逃げられた。

「向こうが有利だったから仕方ないよね……」

リオはこの出来事を、真選組のメンツには秘密にした。

たまには良いかも知れない（前書き）

リクエスト作品

時期は、本編ED後

『妖と夜叉』では、攘夷メンツは、実は仲良しひつ設定です。

たまには良いかも知れない

あなたが幸せに笑うのなら、私は気にしない

たまには良いかも知れない

「銀時イー、来ちゃつた」

「来ちゃつた、じゃねエよ。堂々サボりですか」「ノヤロー」

「うん」

リオは即答で頷いた。

「あのエ、リオ」

「ん?」

「君さア、沖田君に似てきてない?」

「サボり癖?」

「おお」

「大丈夫だよ、沖田隊長公認だから」

いや大丈夫じゃねーだろ、と銀時は思った。

とそこへ玄関のチャイムが鳴った。それと同時に、聞こえてきた声には聞き覚えがあった。

「「…………」」

只今、奴良リオはサボリ中だが、本来勤務中である。ニヤリとした表情を浮かべた。

「ふふふふ

「（ジラ…御愁傷様）」

無言で玄関の戸を開ける銀時。

玄関に立っていたのは、指名手配犯である桂小太郎であった。

「銀時、今日はやけに早く開けて…「かづづづ…アアアアア…」

…！」

ドオオオオンとバズーカが放たれた音がした。

「…やつぱりリオ…沖田君の影響受けすぎじゃねェか…」

ボソッと呟く銀時だった。

その後、リオが放ったバズーカの音よりも更に「カイ音」が玄関先でする。

「「「」」

「アツハツハツハツ、またやつてしまつたじやあ」

「坂本さんー?」

「おお〜金時、リオ!久しぶりじゃのう〜!」

「銀時だアアアアアー!!ボケエエエエー!!」

言いながら銀時は、坂本へ飛び蹴りをした。

「次から次と……アンタはー!!」

「よオ、久しぶりだなア」

「高杉!ー?」めー何でここにー?」

「わしが連れて來たぜよ」

「「「はあー?」」

リオと銀時、知らぬ間に復活していた桂は、揃えて聞き返す声を出した。

「坂本さんつて……本当に頭カラなんですね……普通、敵同士を鉢

合わせますか……」

「アツハツハツハツ。……泣いていい？」

「高杉……次会つたら斬るつづーたが……」

「一時休戦だ」

「いいのかア」

「<sup>ハシ</sup>万事屋を血染まりしたくねエ」

「だそうよオ、幕府の犬さん」

「……別にいいわ」

不本意ながらリオは頷いた。

「すまねえな、リオ」

「本当にだよ、銀時。もう、完全に仕事オフモードにする」

「そうか……」

リオは、仕事中とそうでない時の態度が、かなり違う。公私をしつかり分けているのだ。

「辰馬ア、何の用？」

「皆で酒を飲むぜよ

「それだけの為に？」

酒を呑んで飲む。

その為だけに、敵同士を引き合わせたのだからじゅうまい。

その後、ギャー、ギャーと騒ぐ。

「（たまこは、いつものも悪くないね……）」

リオは、ビートが楽しげな彼らの姿を見て、そう思つた。

「リオも傍に来いよー。」

「うふー。」

そしてまた、リオもビートが楽しげな表情を浮かべていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8069y/>

---

妖と夜叉 番外編

2011年12月1日16時56分発行